

## 唐詩變革——安史の亂前後に於ける李杜の詩から

好川 聰

### 一 はじめに

唐代を初唐（六一八～七〇九）、盛唐（七二〇～七六五）、中唐（七六六～八三五）、晩唐（八三六～九〇七）に分けるのは長らく常識とされていゝ。括弧内に記した西暦は小川環樹『唐詩概説』に依つたもので、論者によつて數年前後するものの、盛唐が詩の最盛期、その中でも李白（七〇一～七六二）と杜甫（七一二～七七〇）の詩を頂點とする點は共通している。安史の亂（七五五）以降の社會情況はもはや盛唐といえるようなものではないが、盛唐を大曆（七六六）直前までかけるのは、杜甫の活躍年代が強く意識されているからである。その傳統的な文學史觀に異論があるうはずもないが、その一方で、二人を同時代の同列に置くのではなく、杜甫が中唐文學の先驅けとなる要素を數多く内包していることから、李白を過去の傳統の集大成、杜甫を新たな傳統の創始者とする見方が提唱されつつある<sup>1)</sup>。いわば李白と杜甫の間を最も大きな時代の分かれ目と捉えるのである<sup>2)</sup>。

同じ時代に生まれながらも對照的な特徴を持つ二人は、編年という點においても、李白の詩は編年しにくい、編年で讀んでもあまり意味

をなさない、逆に杜甫の詩はほぼ全て編年できる、編年で讀んでこそ意味がある、といわれている。この點は盛唐から中唐への詩の變革を考へる上でも重要な要素の一つである。韓愈や白居易ら中唐元和期を代表する文人たちは、杜甫を最初に高く評價しており、その彼らが編年で讀まれるべき詩を作っているからである。そして大まかにいへば、更に後の宋代以降に文人自身が編年の意識を持つて日記のように詩を書きつける流れが定着していくように思われる。編年の可否というのは、作品以外の要素——文集の保存具合や傳記資料の充實度など——が密接に關わつてくるので一概に論じることができない。だが内容についていえば、當時の社會背景や作者の人生と密接に關わる現實報告型の編年で讀まれるべき詩を作っている流れは確かである。ここでは詩の内容に絞つて論じたい。そういった重要な變化のもとを辿れば、李白から杜甫への變化ということになるわけである。

だが、兩者の詩を讀んでみると、編年にふさわしい杜甫の詩も、安史の亂以前の代表作「飲中八仙歌」などは、いつ作られたか定かではなく、編年に意味のないとされる李白の詩も、安史の亂以降の作は「早に白帝城を發す」や「奔亡道中」など、その人生に引きつけて讀

むべき作品を多く残している。盛唐・中唐という時代区分や、李白・杜甫は盛唐の詩人（または、李白―盛唐、杜甫―中唐）という枠組みを取り拂つて考えてみると、より編年にふさわしいものへと向かう詩の動きは、安史の亂を契機にして起こっているように感じられる。従来の文學史のように各時代ごとに詩人を區分するのではなく、安史の亂以前の杜甫の詩、安史の亂以後の李白の詩を丁寧に見ていくと、李白と杜甫に共通する要素が浮かび上がり、各時期ごとの詩風や特徴がもつと明確な形で表れてくるのではないだろうか。

杜甫の安史の亂以前の作品は、全體の割ほどである。この頃の代表作を挙げると、「岱宗 夫れ如何、齊魯 青未だ了ぎず」と詠う「望嶽」や、「浮雲 海岱に連なり、平野 青徐に入る」と詠う「兗州城樓に登る」は、無邊際風景を歌い上げる盛唐詩の特徴がよく表れており、同時期の盛唐山水詩がそうであるように、作者や社會の背景事情はこの詩の理解には必要でない。また、「竹批ぎて雙耳峻そぼだち、風入りて四蹄輕し」と精悍な馬を詠う「房兵曹の胡馬」や、諧謔に満ちた「飲中八仙歌」などは、憂愁に満ちた安史の亂以後の詩歌ではこうした作風にならないという理由から、亂以前の適宜な時期に置かれている。

もちろん、その一方でこの時期の杜甫は自身や政治社會と密接に関わる詩も作っており、編年しづらいというのは全體的な印象を述べたものすぎない。その全貌を明らかにするには多くの研究が必要となるが、まずその足がかりとして、次章では杜甫の戰亂を題材に扱った詩歌に焦點をしばって論じたい。政治や社會と密接に関わる戰亂のうたも、安史の亂以前と以後の詩を細かく読み込んで比較してみれば、

變化が見て取れるからである。

## 二 杜甫の戰亂のうた

### 1. 「兵車行」

安史の亂以前の戰亂のうたとしては、まず「兵車行」が挙げられる。新しい樂府題でもつて社會の有り様を批判するのは、白居易の新樂府運動の先驅とされている。『杜甫全集校注』（人民文學出版社 二〇一四年）の「杜甫年譜簡編」では、天寶十載（七五二）四月に南詔（現雲南省）討伐の遠征軍がほぼ全滅したが、楊國忠がその敗戦を隱蔽して、再度の遠征のため徵發が行われたこと、また、連年玄宗が吐蕃に出兵して多數の犠牲を出していたことを背景として、その冬に作られたとする<sup>③</sup>。翌天寶十一載に繫年する注釋も多くあるが、背景の事情に大差はない。

このようにはつきりと繫年される「兵車行」であるが、詩句が指し示す事實を論じるのではなく、その事實がどのように詠われているかという觀點で見なければ、安史の亂以後の詩との違いが表れてくる。その前半部は以下のように詠われている。

車轡鱗

車轡鱗

馬蕭蕭

馬蕭蕭

行人弓箭各在腰

行人の弓箭 各おの腰に在り

耶娘妻子走相送

耶娘妻子 走りて相い送る

塵埃不見咸陽橋

塵埃に見えず 咸陽橋

牽衣頓足攔道哭

衣を牽き足を頓して道さへぎを攔りて哭し

哭聲直上干雲霄

哭聲 直に上りて雲霄を干かす

道傍過者問行人

道傍の過ぐる者 行人に問えば

行人但云點行頻 行人は但だ云う 點行頻りなりと  
 或從十五北防河 或いは十五從り北のかた河を防ぎ  
 便至四十四營田 便ち四十に至りて西のかた田を營む  
 去時里正與裏頭 去る時 里正 與に頭を裏みしが  
 歸來頭白還戍邊 歸り來たりて頭白くて還た邊を成る  
 邊亭流血成海水 邊亭の流血 海水を成すも  
 武皇開邊意未已 武皇 邊を開くこと 意未だ已まず  
 君不聞 君聞かずや

漢家山東二百州 漢家山東の二百州  
 千村萬落生荆杞 千村萬落 荆杞を生ずるを  
 縱有健婦把鋤犁 縱え健婦の鋤犁を把る有るも  
 禾生隴畝無東西 禾は隴畝に生じて東西無し

馬と戰車の音、兵士と家族の別れから歌い始めているが、具體的な動作でもって臨場感あふれる場面を描き出しており、讀者を作品世界に引き込む効果をもたらしている。續いて「道傍の過ぐる者」が兵士に問い掛ける場面へと移る。この人物は杜甫自身を指すとよく説明されるが、それは明記しない方がよい。「兵車行」には作者の主張が見え隠れするものの、その主張はむしろ兵士の語りの方にこそある。樂府の傳統的な形式に則り、兵士の口吻を借りて、度重なる徵兵に苦しむ民衆を描いているのである。

また、「道傍の過ぐる者」が作者を指すと解すべきでないのは、この樂府が「武皇」や「漢家」と續いているように、漢の武帝の領土擴張政策が舞臺となつているからである。現實から切り離された世界で詠われているわけだから、作者は詩中に登場すべきでない。もちろん、唐王朝を漢に重ね合わせて詠うのはごく普通のことであり、漢武が暗

に唐の玄宗を指すことは明白である。しかし、どのように表現されているかはもつと重視されてよいように思われる。「武皇 邊を開くこと 意未だ已まず」は、杜甫の大膽な皇帝批判の句としてよく言及されるが、歌の表面上は漢の武帝の邊境擴張政策を批判しており、玄宗を直接批判することは避けられている。

以下「兵車行」の後半は五言句を挟みつつ、語りを抑えきれない兵士の怨嗟の聲を描き、最後は、

君不見青海頭 君見ずや 青海の頭  
 古來白骨無人收 古來 白骨 人の收むる無く  
 新鬼煩冤舊鬼哭 新鬼は煩冤し舊鬼は哭し  
 天陰雨濕聲啾啾 天陰り雨濕りて聲啾啾たるを

と締め括る。「君聞かずや 漢家山東の二百州」と「君見ずや 青海の頭」は、東と西との對が意識されているかのようである。實際に目の當たりにした光景ではなく、廣く東西に思いを馳せて大きなスケールで描くのは、盛唐詩の風景に特徴的なものである。また長短自在の詩句のリズムも、杜甫詩の特徴というよりは、李白をはじめとする盛唐の樂府が得意とするところである。こうして見ると、「兵車行」の内容は社會に目を向ける杜甫の特徴がよく表れているが、その表現面は、杜甫の詩風というよりは、盛唐の氣象が色濃く反映された歌といえる。

さらに、前述のとおり「兵車行」は天寶十載から十一載に繫年されるが、その根據にあたってみると、色々気づかされることがある。この歌の背景にある歴史として、多くの注釋書が『資治通鑑』を引用している。前掲の「杜甫年譜簡編」の記述もそれに依つたものである。『資治通鑑』の天寶十載の項には、再度兵を募つた一連の経緯が以下

のように記される。

制まじりして大いに兩京及び河南北の兵を募りて以て南詔を撃つも、人聞く雲南は瘴癘多く、未だ戦わずして士卒の死する者什に八九と。肯えて募に應ずる莫し。楊國忠 御史をして道を分かち人を捕らえ、枷を連ねて送りて軍所に詣らしむ。舊制、百姓の勳有る者は征役を免る。時に兵を調すること既に多く、國忠奏して先に高勳を取る。是に於いて行く者は愁え怨み、父母妻子之を送るに、在る所の哭聲野を振わす<sup>3</sup>。

この最後の「是に於いて」以下は、「兵車行」の「耶娘妻子走りて相い送る」(「耶娘」は父母の俗語)や「哭聲直に上りて雲霄を干かす」に直接依據していることが明白である。その手前の「舊制」以下の記述も、「或いは十五従り北のかた河を防ぎ、便ち四十に至りて西のかた田を營む」の北方の兵役から歸つてきてまた西方に驅り出された詩句と重なり合う。だが、『新舊唐書』本紀の天寶十載の記載や、楊國忠の傳を見ても、雲南遠征の敗戦を覆い隠して再度の出兵をした記述は書かれているものの、一度兵役を終えた人民を再度徴兵したという記述は見られない<sup>5</sup>。つまり、『資治通鑑』の再度の徴兵のくだりは、「兵車行」を史料として記された可能性も考えられる。もちろん他の史料に記されている可能性も十分にあるが、その史料が杜甫に依つたものかもしれない、少なくとも「是に於いて」以下が「兵車行」を明らかに踏まえているのは疑いない。杜甫の「兵車行」は『資治通鑑』で記される歴史事實を詠っているというよりは、司馬光が杜甫の「兵車行」を歴史資料として扱い、記述しているのである<sup>6</sup>。

『資治通鑑』のこの記載は、宋人の詩に對する態度を物語っているように思われる。杜甫詩の内容を事實として認識しているのは、彼ら

自身が事實に則つた詩を作っていることの表れといえよう。後述するように、安史の亂以降の杜甫の作品はそうした傾向を見せており、その意味では宋人が杜甫詩を「詩史」として扱うのは當然といえるわけだが、亂以前の作品については留意しなければならない。というのは、「兵車行」の中で兵士が向かう先は北方と西方であり、南詔遠征が直接述べられているわけではないからである。南詔遠征を背景としつつ詩中で南方に觸れないのは、清代の頃から既に議論が見られる。錢謙益は『資治通鑑』を引用しつつ「兵車行」が南方遠征に觸れないのは、楊國忠を憚つたからであるとし、それに對して潘耒が「書社詩錢箋後」の中で、「詩中に止だ防河・營田・關西・青海と言ひ、一字として南征に及ぶ無し。何ぞ必ずしも南詔の事に牽引せんや」と述べ、「武皇開邊」と天子を憚らないのに權臣を憚るはずはないと反駁している<sup>7</sup>。

このような表現を杜甫が用いるのは、漢代の古樂府以來の傳統に則つたものといえる。漢の武帝の時代にも南越遠征は行われたが、文學の中で詠われるのは、「飲馬長城窟行」などもつばら對匈奴の北方西方が中心である。史傳の中で匈奴にまつわる逸話が多いことも影響していよう。また西方はシルクロードへ通じることから唐代では「邊塞詩」が流行し盛んに詠われている。杜甫はこうした傳統の型に當てて詠つているために事實とのズレが生じるのである。

一言斷つておくと、南方への兵役を題材とした詩がないわけではない。李白「古風五十九首」其三十四には、「兵車行」と同じく兵士との問答のスタイルをとつて以下のように述べる。

借問此何爲 借問す 此何爲れぞと  
答言楚徵兵 答えて言う 楚の徵兵と

渡瀘及五月 瀘を渡るは五月に及び

將赴雲南征 將に雲南の征に赴かんとす

怯卒非戰士 怯卒は戰士に非ず

炎方難遠行 炎方 遠行し難し

五月の夏の盛りに灼熱の南方に遠征する苦難を語り、以下猛虎に苦しめられたり鯨の餌となったりと戦う以前に危機にさらされ、「千たび去りて一も回らず、軀を投ずれば豈に生を全うせんや」と死を覺悟した兵士の悲しみを詠う。南方遠征を詠う型がありながらも、杜甫は傳統的な北方の兵役の構成をとつたともいえよう。なお、李白のこの歌も『李太白全集』（中華書局 一九七七年）などが前掲の『資治通鑑』を引くように、南詔遠征が意識されていると思われる。だが、李白は「古風五十九首」という制作年代が特定しづらい一連の作品の中に組み込んでおり、いつどこで作つたなどという編年の意識は全く持つていないかのようである。

諸家がいうように、「兵車行」が南詔遠征を背景としていることは間違いない。新しい樂府題をつけ、その内容は現實社會の有り様と結び付けて批判するものであるが、その表現は過去の文學の傳統に則り、漢武帝の匈奴に對する領土擴張政策を舞臺としている。現實を直接詠わず、ある程度切り離して詠うところが、「兵車行」の文學の方向性といえるわけである。社會詩として、安史の亂以後の戰亂のうたと同列に扱われがちな「兵車行」も、どのように表現されているかに着目してみれば、様々な違いが見て取れるのである。

## 2. 「前出塞九首」「後出塞五首」

「兵車行」につづく戰亂を題材にした歌としては、「前出塞九首」が擧げられる。この樂府の繫年には幅があり、『杜詩詳注』は「兵車行」の次に置き、諸家も概ね同時期に繫年しているが、安史の亂以後の乾元二年（七五九）、秦州での作とするものもある。繫年が定まらないうのは、具體的な状況が記されないこの詩の性格を物語っており、その事自體が安史の亂以前の作風であることを窺わせる。其一では以下のように詠い起す。

戚戚去故里 戚戚として故里を去り

悠悠赴交河 悠悠として交河に赴く

公家有程期 公家 程期有り

亡命嬰禍羅 亡命 禍羅に嬰る

君已富土境 君は已に土境に富むに

開邊一何多 邊を開くこと一に何ぞ多き

棄絶父母恩 父母の恩を棄絶し

吞聲行負戈 聲を吞みて行くゆく戈を負う

兩親との別れをこらえて西域の地に徵兵される悲哀が、一兵士の視點から語られる。「交河」は新疆ウイグル自治區の吐魯番周邊に位置する。「刀を嗚咽の水に磨けば、水赤くして刃は手を傷つく」（其三）、「徑危うくして寒石を抱き、指は曾氷の間に落つ」（其七）といった痛々しい苦難にも耐え、其八では砦に押し寄せた「單于」の軍と戦い、

虜其名王歸 其の名王を虜え歸り

繫頸授轅門 頸を繫げて轅門に授く

潛身備行列 身を潜めて行列に備わる

一勝何足論 一勝 何ぞ論ずるに足らんや



と、王を捕虜にする戦果を擧げて、その首を軍門にかけて自分はひつそりと軍列に戻り、目先の勝利にとらわれない姿が描かれる。最後の其九も、従軍する十数年の間に擧げた手柄は決して誇らず、

丈夫四方志 丈夫 四方に志す

安可辭固窮 安くんぞ固窮を辭すべけんや

と男子たるもの四方に志し困窮を耐え忍ばなければならぬと締め括る。このように「前出塞九首」は一連の流れをもった兵士の物語詩で、従軍する中でたくましく成長していく過程に焦点が当てられる。國のために戦う兵士の、一つの理想的な有り様が示されているといえよう。

其一の「君已に土境に富むに、邊を開くこと一に何ぞ多き」という君主への不満は、通して讀むとそれに應えんとする兵士の氣概へと變貌をとげる。この作品は、「兵車行」等と同じく戦争に苦しむ兵士を描く厭戦のうた、軍事に傾く政治を批判した詩として扱うこともできるが、苦難に耐えて功績も誇らず國のために働く兵士を描く督戦のうたとして讀むこともできる。時代や地域を越えて、高く評價され続ける杜甫詩の懐の深さを表していよう。

このように、「前出塞九首」は、作者杜甫が表に表れることはなく、一兵卒を主人公として語られている。西域へ従軍すること以外は、同時代の戦争に結び付く具體的な状況が語られることはない。吐蕃との戦争を背景としているが、いつ、どこで、などは詩の構成上語る必要もないわけである。

一方、「後出塞五首」は、『杜詩詳注』をはじめ、おおむね安史の亂の直後に繫年される。其一の冒頭では、

男兒生世間 男兒 世間に生まれ  
及壯當封侯 壯に及びては當に侯に封ぜらるべし

唐詩變革

戰伐有功業 戰伐に功業有り

焉能守舊丘 焉くんぞ能く舊丘を守らんや

召募赴薊門 召募 薊門に赴く

軍動不可留 軍動きて留むべからず

と、この世に生まれたからには先祖代々の土地を守らず、戦で功績を擧げて列侯に封じられたいとする氣概を詠う。「薊門」は現在の北京にあたり、その募兵に應じて北京へ赴く兵士の物語詩となっている。作者が表に表れず、一兵卒の視點から描かれるのは「前出塞」と共通しているが、異なる點も見られる。其二は北京に赴く道中の洛陽近郊での野營、其三では武勳を擧げ主君に捧げたいと願う意氣、其四で到着した北京の賑やかで物産の豊かな様子が描かれるが、後半は以下のように語られる。

主將位益崇 主將 位益ます崇く

氣驕凌上都 氣驕りて上都を凌ぐ

邊人不敢議 邊人 敢えて議せず

議者死路衢 議する者は路衢に死す

大將が都長安を軽んじるほどの驕りぶりに、邊境の部下達は諫める勇氣も持たず、口にしたものは白晝大通りで殺されることがまかりとおる。こうした不穩な空氣は最後の其五に至って顕在化する。三句目からは、

將驕益愁思 將驕りて益ます愁思し

身貴不足論 身の貴きは論ずるに足らず

躍馬二十年 馬を躍らせること二十年

恐辜明主恩 明主の恩に辜くを恐る

坐見幽州騎 坐して見る 幽州の騎

長驅河洛昏 長驅して河洛昏きを

とあり、其四と同じく主將の驕りや、「幽州」（北京一帯）の騎馬隊が「河洛」洛陽まで長驅するのは、詩の上では明示されていないが、幽州に本據を置く安祿山が朝廷をないがしろにし、天寶十四載（七五五）冬に洛陽に兵を向ける行爲を描いたものと断定せざるを得ない。今現在起こっている具體的な状況と切り離して詩を讀むことはできないわけである。「兵車行」や「前出塞」と同じく一兵士を主人公とした創作であるが、安史の亂がからむ「後出塞」では、詩と現實との距離が縮まっているのである。

全體を通じてみると、兵士の高らかな氣概から歌い出すのは、「前出塞」がもの悲しく故郷を離れるところから始まるのと好対照であり、募兵に應じた者と徵兵に驅り出された者との對比でもある。そして「後出塞」が叛亂の氣配漂う軍中で思い悩み、結局脱走して歸つたが故郷は空っぽ、孤獨な老人となりはたと結ぶのも、前述の「前出塞」の最後と對照的であり、杜甫の意識的な工夫が窺える。遠征で多數の犠牲を出しながらも、なお開元以來の唐王朝の權勢と安定が信じられていた時期と、安祿山が副都洛陽へと攻め入り、今後の不安がかくしきれない天寶末年の社會狀況が詩の情緒に反映されているともいえるだろう。

3. 安史の亂以後の戰亂のうた

「後出塞」に示された變化は、安史の亂以降に顯著になつていく。安史の亂を機に杜甫はささやかな官職を得る。華州司功參軍の役職にあつた乾元二年（七五九）三月、出張先の洛陽から華州へ戻る道中の體験をつぶさに詩に描いた。「三更三別」とまとめられる一連の作

である。これより前、官軍は至徳二載（七五七）九月に長安、ついで洛陽を奪還したが、まだなお安史の軍との戰爭は續いていた。長安と洛陽を結ぶ要衝の地、「潼關の吏」では、せつせと城塞を造營する現地の役人に問い掛けて以下のように續く。

借問潼關吏 潼關の吏に借問すれば

修關還備胡 關を修めて還た胡に備う

要我下馬行 我に要めて馬を下りて行かしめ

爲我指山隅 我が爲に山隅を指す

連雲列戰格 雲に連なりて戰格を列べ

飛鳥不能踰 飛鳥も踰ゆる能わず

胡來但自守 胡來たらば但だ自ら守らん

豈復憂西都 豈に復た西都を憂えんや

潼關の守備に絶對の自信を持つ役人とのやりとりが記されるが、詩中の「我」は杜甫自身である。「兵車行」や前後「出塞」の樂府のように、兵士を主人公とするのではなく、自分自身の體験として描かれている<sup>10)</sup>。この堅固な關所は一人でも十分賊軍を防ぎ得ると豪語する役人に不安を覺えた杜甫は以下のように詩を結ぶ。

哀哉桃林戰 哀しい哉 桃林の戦い

百萬化爲魚 百萬 化して魚と爲る

請囑防關將 請いて關を防ぐ將に囑す

慎勿學哥舒 慎しんで哥舒を學ぶ勿かれ

「桃林」は河南省の地で、官軍の將哥舒翰は朝廷の命に背けず潼關から打つて出て安祿山の軍とここで交戦した。だが結果は大敗し、それが長安陥落の事態を招く。その轍を踏まぬようにと言付けるわけだが、詩中では桃林の戦いの「哥舒」と同時代の人物を明記している。例え

ば「後出塞」其二「借問す 大將は誰ぞ、恐らくは是れ霍嫫姚」のように、嫫姚校尉であつた前漢の名將霍去病を借りて、安祿山ないしその武將を指す手法とは異なっている。「漢末の實録」と稱される曹操の「薤露」や「蒿里」などでも、何進や董卓、袁紹を名指しで描いているわけではない。「潼關の吏」では、今現在進行している事態を漢代に擬えたりせずに直敘して詠うのが、それまでの杜甫詩とは異なるわけである。

また、つづく「石壕の吏」でも、杜甫の體驗が語られる。「石壕」という無名の村を明記し詩題とするのも珍しいことで、讀み手に今現在起こっている悲劇として訴える効果をもたらしている。その前半部を引用すると、

暮投石壕村 暮に石壕の村に投ずるに  
有吏夜捉人 吏有りて夜に人を捉う  
老翁踰牆走 老翁 牆を踰えて走り  
老婦出門看 老婦 門を出でて看る  
吏呼一何怒 吏の呼ぶこと一に何ぞ怒れる  
婦啼一何苦 婦の啼くこと一に何ぞ苦しめる  
聽婦前致詞 婦の前みて詞を致すを聽くに  
三男鄴城戍 三男 鄴城の戍り  
一男附書致 一男 書を附して致り  
二男新戰死 二男 新たに戰死すと

と夜中に不意打ちで徴兵に來た役人と老婦とのやりとりが記されるが、夕方に宿に宿泊し、老婦の言葉に耳をすませたのは杜甫自身である。「新安の吏」の「客は行く新安の道、喧呼 兵を點するを聽く」の旅人も、杜甫自身を指すと考えてよい。このように安史の亂以前の

第三者視點の樂府の語り口から、杜甫自身の體驗を描く詩へと移行するのは、樂府體から五言古詩へと詩の形式が變化したためだけではない。詩の形式を變えたこと自體が杜甫の意識の變化を物語っているが、安史の亂以降の樂府にも語り口の變化が見られる。安史の亂直後の樂府として、『樂府詩集』には「哀江頭」「悲青坂」「悲陳陶」が収録されているが、「哀江頭」の冒頭は「少陵の野老 聲を吞みて哭し」と始まる。この「少陵」は「杜陵に布衣有り、老大にして意は轉た拙なり」（京より奉先縣に赴く詠懷五百字）と杜甫が自稱する杜陵の側にあり、「少陵の野老」も杜甫の自稱であることは明らかである。また、至德二載（七五七）の作とされる「彭衙行」では、

憶昔避賊初 憶う昔 賊を避けし初め  
北走經險艱 北に走りて險艱を經るを  
夜深彭衙道 夜は深し 彭衙の道  
月照白水山 月は照らす 白水の山  
盡室久徒步 室を盡くして久しく徒步し  
逢人多厚顏 人に逢うも厚顏多し

と始まり、杜甫が一家を引き連れて避難する經緯が追憶という形で語られていく。「行」という樂府に倣った詩題をとりながらも『樂府詩集』に収められないのは、杜甫自身の回想としてその體驗が描かれていることが明白だからと考えられる。このように、安史の亂以後の杜甫は、樂府體においても自分自身の體驗として詠うようになるのである。

また、「石壕の吏」で三人の息子が「鄴城」の守備に當たり二人が戰死したと語られるが、これは乾元元年（七五八）九月、郭子儀率いる官軍が鄴城（河南省安陽市）に籠もる安慶緒の軍を包圍するも、翌



二年三月に救援に駆けつけた史思明に大敗を喫する。こうした経緯が踏まえられていよう。そして詩の後半では老婦が男手のかわりに洛陽付近の前線基地である「河陽の役」に急ぎ赴くことを申し出る。こうした「鄴城」や「河陽」、また「石壕」という詩中の地名は、「兵車行」の「北防河」や「西營田」、「山東二百州」や「青海頭」が漠然と広い地域をいうのとは異なり、より限定されたものである。前述「後出塞」の「幽州」「河洛」や、「潼關の吏」の「桃林」の戦いもそうだが、こうした地名を用いるのは、具體的な事柄へ結びつけようとする意識の表れと見ることもできるだろう。

このように、杜甫の戦亂を題材とした詩は、安史の亂以前の現實とある程度切り離して詠う型から、現實を直敘する型へと變化していることがみてとれる。もちろん、現實を直敘する型へと變化している文學形式に沿って作られる以上、現實をそのままに描くわけではないが、現實と作品との距離が縮まっているのは確かである。言い換えれば、杜甫が實際に體驗したかどうかは問題ではなく、實際に體驗したかのように詩に描く姿勢が、安史の亂以前とは異なるのである。このように、安史の亂以前と以後における變化を綿密に比較して明確にし、それを積み重ねることで、この時期に起こった詩の變革というものが見えてくるのではないだろうか。

### 三 李白の安史の亂以降の作

#### 1. その足跡と詩

李白の「北上行」は、曹操「苦寒行」の第一句「北上太行山」に模擬した樂府であり、「北上 何の苦しむ所ぞ、北上は太行に縁る」と始まる。この樂府には安祿山の起こした戦火に逃げ惑う人民の苦難が

描かれているが、そう斷定できるのは詩中にそれを暗示する一節が見られるからである。

沙塵接幽州	沙塵	幽州に接し
烽火連朔方	烽火	朔方に連なる
殺氣毒劍戟	殺氣	劍戟よりも毒なり
嚴風裂衣裳	嚴風	衣裳を裂く
奔鯨夾黃河	奔鯨	黃河を夾み
鑿齒屯洛陽	鑿齒	洛陽に屯す

「幽州」といい、「鑿齒」という傳説上の惡獸が洛陽にたむろするのは、幽州の安祿山が洛陽を占據した事態を指し示している。例えば、「長安 一片の月、萬戸 衣を擣つ聲。秋風 吹きて盡きず、總べて是れ玉關の情」(「子夜四時歌」其三)のように、李白の傳統的な樂府がいつ、どの出來事を踏まえるか不明瞭で、現實と切り離して詠っているとは異なるのである。杜甫は新しい樂府題、李白は既存の樂府題を用いるというのはよくいわれる對比であるが、ここでは「苦寒行」といわずに「北上行」という過去にない題をつけており、『詩經』のように冒頭の二字をもつて詩題とする古風な手法を用いている。白居易の新樂府運動は樂府本來の精神に立ち返って社會を諷刺批判することであり、その先驅として杜甫の「兵車行」などが挙げられるが、李白がわざわざ新しい樂府題をつけたのも同じように、今現在起こっている事態を批判しようとした意圖がこめられているのかもしれない。

このように、編年しにくい、編年に意味をなさないと思われる李白の詩も、安史の亂以降は作者の人生や社會と關わる作品が目立つようになる。もちろん、李白の編年しえない詩の中には、安史の亂の最中に作られた作品も含まれているだろうが、安史の亂以降と特定できる作

品は、それ以前と詩風が異なることも確かである。李白の足取りとともに詩を簡單に追ってみると、安史の亂に際して李白は永王李璘の招聘に應じて、廬山を下りる。至徳二載（七五七）正月、その軍營に入った時期の作「永王東巡歌十一首」の其五では、以下のように詠う。

二帝巡遊俱未迴 二帝巡遊して俱に未だ迴らず

五陵松柏使人哀 五陵の松柏 人をして哀しましむ

諸侯不救河南地 諸侯は河南の地を救わず

更喜賢王遠道來 更に賢王の遠道より來たるを喜ぶ

二帝は玄宗と肅宗を指す。この時長安は賊軍に占領されて皇帝は不在であり、先帝たちの陵墓が空しく放置されたままであるという時事が詠われる。河南の地を奪還するのは賢王李璘を置いて他にはいないと詩に期待を込めるが、永王は無斷で水軍を動かしたと肅宗政權に見なされ、反亂軍の烙印を押された。永王が敗れると李白は逃亡し、正規軍から追われる身となる。先の詩の「二帝」の無爲を嘆き永王の即位を期待するともとれる内容も、反逆者と見なされた一因であろう。「奔亡道中五首」は、こうした状況の中で作られ、「萬重 關塞斷つ、何れの日か是れ歸年ならん」（其一）等の表現は、李白の當時の状況とリンクさせてこそ理解が深まる。

その後、すぐに捕らえられて獄中生活を送り、同年九月に夜郎への流罪が決まる。引用は省くが「獄中にて崔相渙に上る」や、「夜郎に流されて辛判官に贈る」など、詩題からいつ作られたか分かる詩を作っている。そして恩赦にあつた際の代表作が「早に白帝城を發す」である。

朝辭白帝彩雲間 朝に辭す 白帝彩雲の間

千里江陵一日還 千里の江陵 一日にして還る

兩岸猿聲啼不盡 兩岸の猿聲 啼きて盡きざるに  
輕舟已過萬重山 輕舟 已に萬重の山を過ぐ

この詩は二十五歳に初めて蜀を出た時の作とする説もあるが、多くの注釋者が説くように、乾元二年（七五九）の五十九歳の時、夜郎に流罪になって足取り重く任地に赴く途中、恩赦にあつて引き返す際に作られた詩とするのがふさわしい。初めて蜀を出た時では「還」はそぐわず、恩赦で江陵へと引き返す作品と特定できよう。詩中で流謫や恩赦が明示されているわけではないが、流謫から解放された軽やかな気分と逸る歸心が舟の疾走感に表れ出ており、李白の人生に引きつけて讀んだ方が詩の味わいがより深まる内容となっている。

このように安史の亂以前に比べて、容易に李白の足取りをその詩とともに追うことができるが、この事は松浦友久『李白傳記論—客寓の思想—』の中で既に論じられている。

一般に李白の作品は、李白自身の傳記的事跡との距離が大きく、詩史的・作詩日記的な杜甫や白居易の作品に比べて、個々の作品の正確な編年が容易でない。……（中略）……しかし、すでに明らかのごとく、「永王東巡歌」「南奔書懷」「萬憤詞、投魏郎中」「在尋陽非所、寄內」「爲宋中丞自薦表」「竄夜郎、於烏江、留別宗十六璟」「流夜郎、永華寺寄潯陽郡官」「南流夜郎、寄內」等々、安史の亂に關連した諸作品は、おおむね、一人稱的な、主體的視點からの描寫が中心となっており、作者の傳記的事跡との距離が著しく小さい。この時期の作品に正確な編年の可能なものが多いのも、當然であろう。

むろん、これらの諸作品には、——恐らくはその手法が李白詩の本來的な資質と相い反することによって——かれの詩文におけ

る決定的な代表作と評すべきものは、ほとんど見いだしがたい。しかし、この時期の諸作品の存在が、李白の詩文の總體に多様性を與え、かれの傳記的事跡を明確化していることは確かである。

文中に作品が列擧されているが、ここで擧げられた詩題だけからも、李白の足取りをある程度追うことができよう。ただ、この編年可能な詩が多いという現象をどう分析するかに關しては、松浦氏はそれらの詩群の中には李白の代表作は見出しがたいとし、多様性を與え傳記的事跡の明確化に貢獻しているという消極的な評價に留めている。李白という詩人個人の中で見ればその通りで異論は全くないが、「李白詩の本質的な資質と相い反する」部分―編年で讀まれるべき詩を作っているという變化―というのは、時代の流れの中に置いて考えてみれば、大きな意味を持つのではないだろうか。

ただし、松浦氏は上記の引用に續けて「赦免から長逝に到る最晩年の作品が、ふたたび編年の困難な情況にもどつてゐる」とも述べている。李白の詩風の變化が赦免以後の詩にどの程度影響を與えているかはあらためて精査しなければならない。しかし、夜郎流罪赦免後にも、李白の人生と密接に關わる注目すべき作品が残されている。次節でその詩の特徴と時代との關わりを論じたい。

## 2. 李白の長編回想詩

「經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰（亂離を經し後、天恩夜郎に流さる。舊遊を憶いて懷いを書し、江夏韋太守良宰に贈る）」は、夜郎流罪から恩赦にあつた後、乾元二年（七五九）に作られたとされる。詩の中でその經緯が詳しく語られる一六六句の長編五言古詩で、杜甫の「北征」（二四〇句）を超える李白最長の雄編である。この長さ

自體に李白のこの詩への意氣込み、思い入れが感じられる。

天上白玉京 天上の白玉京

十二樓五城 十二樓五城

仙人撫我頂 仙人 我が頂を撫で

結髮受長生 髮を結いて長生を受く

誤逐世間樂 誤りて世間の樂しみを逐い

頗窮理亂情 頗る理亂の情を窮む

冒頭は自身の若い頃からの回想から始まるが、自分は仙界から人界

に墮ちてきたと詠い起すのは、賀知章に「謫仙」と稱されたいかにも李白らしい表現である。十一句目からは、

試涉霸王略 試みに霸王の略に涉り

將期軒冕榮 將に軒冕の榮を期せんとす

時命乃大謬 時命 乃ち大いに謬り

棄之海上行 之を棄てて海上に行く

學劍翻自哂 劍を學びて翻つて自ら哂い

爲文竟何成 文を爲りて竟に何をか成す

劍非萬人敵 劍は萬人の敵に非ず

文竊四海聲 文は四海の聲を竊む

兒戲不足道 兒戲 道うに足らず

五噫出西京 五噫 西京を出づ

と霸王の軍略もて榮達を志すもうまくいかず棄て去り、劍を學び詩文を作つたところをたいした役には立たず、「五噫」を詠つて都を出ることとなると述べる。「五噫」は後漢の梁鴻が都を發つ際に歌つた歌で、巨大な宮殿と民の勞苦を對比したことで皇帝の不興を買い、梁鴻は姓名を變えて暮らすこととなつた。自身の都の立出と重ね合わせて

いるわけだが、一連の流れは李白が詩才でもって宮廷で翰林供奉とい  
うささやかな官職を得るものの、放埒な振る舞いが高力士らの忌避を  
買い、玄宗から金を賜つて都を追い出されたことが、「五噫」という  
典故で屈折して表れている。こうした大きな志をいだきつつもそれが  
失意へと變わっていく構成は、杜甫の「韋左丞丈に贈り奉る二十二  
韻」や「壯遊」が昔を回想する中で、少年期の自負が次第に打ち破ら  
れていく様を描いているのと共通している。

つづいて本詩は、詩を贈つた韋太守（誰を指すかは未詳）との友誼を  
振り返りつつ、安祿山の叛亂前に幽州を訪れた際の不穩な様子を語つ  
た上で、安史の亂については、以下のようにその経緯を語る。

漢甲連胡兵	漢甲	胡兵に連なり
沙塵暗雲海	沙塵	雲海暗し
草木搖殺氣	草木	殺氣に搖れ
星辰無光彩	星辰	光彩無し
白骨成丘山	白骨	丘山を成し
蒼生竟何罪	蒼生	竟に何の罪かあらん
函關壯帝居	函關	帝居を壯んにし
國命懸哥舒	國命	哥舒に懸かる
長戟三十萬	長戟	三十萬
開門納兇渠	門を開きて	兇渠を納る
公卿如犬羊	公卿	犬羊の如く
忠讜醜與俎	忠讜	醜 <small>かひ</small> と俎 <small>そ</small> と
二聖出遊豫	二聖	出でて遊豫
兩京遂丘墟	兩京	遂に丘墟

自然の姿をも不穩なものに變えてしまうような官軍と賊軍との戦い

が描かれ、罪無き人民が白骨の山を成し、官軍は期待に應えられず玄  
宗と肅宗は都を出奔、長安洛陽が廢墟と化したと述べる。「國命 哥  
舒に懸かる」と期待を背負わせながら、次句で城門を開いて敵軍三十  
萬を内に入れると續けるのは、敗戦を招いた哥舒翰への落膽が滲み出  
ていよう。「哥舒」と具體名を出すのは、前述の杜甫の「潼關の吏」  
で述べたとおりである。このように時事を詳しく語るのは、杜甫の詩  
風に近いものがある。

この亂に際して、李白自身は廬山で安逸の生活を送っていたと詩に  
述べるが、それが永王李璘によつて破られる様が次に描かれる。

半夜水軍來	半夜	水軍來たり
尋陽滿旌旆	尋陽	旌旆滿つ
空名適自誤	空名	適たま自ら誤り
迫脅上樓船	迫脅	せられて樓船上る
徒賜五百金	徒らに	五百金を賜りしも
棄之若浮煙	之を棄つる	こと浮煙の若し
辭官不受賞	官を辭して	賞を受けざるも
翻譎夜郎天	翻つて	夜郎の天に譎せらる

ここで語られるのは、永王の幕下に加わったことへの辯明である。  
自らの虚名が偶然誤りを招いたとし、脅迫されてやむなく招聘に應じ  
たまでで、報奨金も官位も辭退したのに、結局夜郎流譎の憂き目にあ  
つたと、自分が如何に不本意でやむを得なかつたか、極力關わりを持  
たないようにしたかが訴えられているのである。もつとも、前述の  
「永王東巡歌」等を讀めば、その當時の李白にそんな思いはなかつた  
ようであるが、このように時事や自己の一生を長編の回想で語るのは、  
従來の李白には見られなかつた變化といえる。



## 四 おわりに

安史の亂を契機として何故李白と杜甫の詩歌の記録性に對する意識が高まり、現實と作品との距離が縮まつたか、その原因は推測で語るほかないが、ひとつには、唐王朝が絶頂期から一氣に轉落し、それまでの安定した基盤や自分たちが信奉してきた世界が突如崩壊したことで、これまでと違つて見える世界を、過去の因襲に依らず現實に即して記録しようとしたことが一因と考えられる。

ただ、杜甫についていえば、安史の亂以前から詩の變革に對する思ひは燻つていたように思われる。李白と杜甫の詩風は様々な點において對照的な特徴が見られるが、天寶三載（七四四）に二人が出會つた時、李白の天賦の才を目の當たりにした杜甫は、その後意識的に努力して李白とは異なる詩的世界を目指そうとしたふしが見られる。それが安史の亂の非日常的な體驗によつて結實することになる。結果として李白も同じ方向の變化を見せることになるが、杜甫は安史の亂が落ちて着いて以降も、現實や自分の人生に即した詩を作る姿勢を保持し續けたことが、非日常の記録から日常の記録という、白居易や宋代の詩へと繋がつていく大きな變化を見せる要因になつたのではないだろうか。こうした變化は編年の問題を考える上で非常に重要だが、様々な要因が絡み合う複雑な問題であり、より多くの研究を積み重ねた上で論じたい。

これまでに述べた安史の亂における詩の變革は、大曆時代には目立つた動きを見せないが、貞元から元和にかけて韓愈や白居易を初めてする中唐の文人たちによつて李白と杜甫が見いだされ、繼承されてい

くことになる。前章で述べた李白の長編回想詩もその一つであり、中唐の文人たちが南方に左遷されたとき、韓愈「岳陽樓にて寶司直に別る」(九二句)や「江陵に赴く途中……翰林三學士に寄贈す」(二四〇句)、劉禹錫「武陵書懷五十韻」や元稹「翰林白學士の書に代うに酬ゆ一百韻」など、いずれも自身の人生を回想する中で左遷の無實を辯明したり、不遇を訴えていたりしている。拙論「韓愈の長編回想詩をめぐつて」の中で論じたときは、こうした長編回想詩は、杜甫の五言古詩形式の回想詩を意識して作られたことを指摘したが、李白の長編回想詩もその先鞭となるものであり、中唐文學へと繋がつていく詩が見られるのである。これまで、中唐文學への繋がりを論じる際には杜甫が重要視され、李白に關してはあまり言及されてこなかつたように思われる。杜甫を初めて高く評價したのは、韓愈ら中唐の文人たちだが、「昔年李白杜甫の詩を讀むに因り」(韓愈「酔いて東野を留む」)、「李杜文章在り、光燄 萬丈長し」(韓愈「張籍を調る」)、「又た詩の豪なる者、世に李杜と稱す」(白居易「元九に與うる書」)など、李白と並稱して讃えているわけであり、李白がどういったものを中唐文學にもたらしたか、改めて考える必要があるだろう。

文學史觀というのは、讀み手の興味や關心の移ろいによつて、時代ごとに變容していくものである。近年多くの優れた研究によつて様々な詩人たちの個性や特色が明らかになりつつある今、今一度文學史を捉え直してみる必要があるのではないだろうか。本稿では、筆者の手に餘る大きな問題のわずかな領域を論じたに過ぎず、問題點の指摘に止まるものであるが、文學史を見つめ直すきっかけとなれば幸いである。



注

- (1) 川合康三『新編中國名詩選(中)』「盛唐の詩歌」八九頁(岩波文庫二〇一五年)等参照。
- (2) 李白と杜甫の間で時代を区切る文學史は、陸侃如・馮沅君『中國詩史』(商務印書館一九三二年)にも見える。安史の亂以前は李白まで、亂以後は杜甫からで唐代を二分しているが、杜甫を中唐文學に引きつけて論じたというよりは、活躍年代的に分けた傾向が強い。
- (3) 十二卷、六五二五頁。
- (4) 原文「制大募兩京及河南北兵以擊南詔、人間雲南多瘴癘、未戰士卒死者什八九、莫肯應募。楊國忠遣御史分道捕人、連枷送詣軍所。舊制、百姓有勳者免征役、時調兵既多、國忠奏先取高勳。於是行者愁怨、父母妻子送之、所在哭聲振野」。
- (5) 例えば『舊唐書』楊國忠傳には、「(天寶十載)國忠又使司馬李宓率師七萬再討南蠻。宓渡瀘水、爲蠻所誘、至和城、不戰而敗、李宓死於陣。國忠又隱其敗、以捷書上聞。自仲通、李宓再舉討蠻之軍、其徵發皆中國利兵、然於土風不便、沮洳之所陷、瘴疫之所傷、饋餉之所乏、物故者十八九。凡舉二十萬衆、棄之死地、隻輪不還、人銜冤毒、無敢言者。」とある。
- (6) 『資治通鑑』が詩を歴史史料として扱う例は、他に貞觀七年(六三三)の「去歲 縱つ所の天下の死囚凡そ三百九十人」の人数に關する『考異』で、「……今年の實錄乃ち二百九十九人有り……又た白居易の樂府に死囚四百來たりて獄に歸ると云う。舊本紀、統紀、年代記皆二百九十人と云う。今新書刑法志に從う」などに見える。舊來の史料はいずれも二百九十(九)であることから、『新唐書』の編纂者が白居易の詩によって數を改めた可能性もあるが、いずれにせよ白居易詩を重要な根據として扱っていることが窺える。しかしながら、白居易のこの句は、「怨女三
- 千 放ちて宮を出だし」(「新樂府 七徳の舞」と對になるものであり、「四百」としたのは、「三」を繰り返さない方が對が整うからである(宮女が三千なのも「後宮の佳麗 三千人」(「長恨歌」)など、一つの定型)。こうした事實と詩の修辭との距離感といった點に、唐人と宋人との認識の差異が窺われるように思われ、本稿の論點にも深く關わつてくるが、「詩を以て史を證す」ことは、多くの事例や論考があり、大きな問題なので、別の機會に改めて考えてみたい。
- (7) 『錢注杜詩 上』一〇頁(二〇〇九年 上海古籍出版社)参照。また、潘耒の「書杜詩錢箋後」の引用は『杜甫全集校注』第一卷に依る(二三八頁)。
- (8) 李白に編年の意識自體が薄弱なことは、たとえば松浦友久編譯『李白詩選』(岩波文庫 一九九七年)の中で李白の編年が著しく困難な理由として、「むしろ、李白の作品自體が、作者の傳記的事跡を反映しにくい手法を基調として詠われているからだ、と言うべきであろう」(三八八頁、傍點は原文のまま)などと指摘されている。
- (9) 吉川幸次郎著 興膳宏編『杜甫詩注 第七册』(岩波書店 二〇一三年)では、王琪本が秦州の古體詩の最後に置いていることに從うが、必ずしもその保證はないとする(三八四頁参照)。
- (10) 川合康三「中國のいくさの詩―杜甫の早期の詩を中心に」(『岩波・文學』二〇一五年三・四月號)では、安史の亂以前のいくさの詩を分析しているが、安史の亂以後は「樂府の形式を捨て、自分の肉聲で語るようになる」とその展望が記されている(一九八頁)。
- (11) 沈德潛『古詩源』「雉露」の評に、「此れ何進の董卓を召す事を指す。漢末の實錄也」とある。
- (12) ただし、『文選』卷二八の陸機「苦寒行」李善注には、「或いは北上行と曰う」とあり、既に「苦寒行」と「北上行」とが混用されていた可能

性も考えられる。

- (13) 「新樂府」の最後「采詩の官」では、従來の樂府に對して「郊廟登歌 君の美を贊し、樂府の豔詞 君の意を悦ばしむ。若し輿論規刺の言を求むれば、萬句千章に一字無し」とし、「先ず歌詞に向かいて諷刺を求めよ」と結ぶ。

- (14) 研文出版、一九九四年。三一―九頁。

- (15) 例えば「奉贈韋左丞丈二十二韻」では、「甫昔少年日、早充觀國賓。讀書破萬卷、下筆如有神。賦料揚雄敵、詩看子建親（甫は昔少年の日、早に觀國の賓に充てらる。書を読みて萬卷を破り、筆を下せば神有るが如し。賦は揚雄を敵と料り、詩は子建を親と看る）」といった少年期の自負が「此意竟蕭條、行歌非隱淪（此の意 竟に蕭條、行歌 隱淪に非ず）」と結局成就せず落ちぶれたと述べる。

- (16) 『日本中國學會報』第六十集、二〇〇八年。一〇三頁。